

# Jack 多項式と Lauricella の超幾何級数

関西学院大学大学院理工学研究科数理科学専攻

玉岡 優一 (TAMAOKA Yuichi)

## 1 はじめに

退化したパラメーターに対する Jack 多項式を Lauricella の超幾何級数を用いて具体的に表した。

関口 [9] は対称空間  $SL(3, \mathbf{R})/SO(3)$  上の退化したパラメーターに対する球関数の満たす微分方程式系と Appell の超幾何級数  $F_1$  の満たす微分方程式系を関係づけることにより、退化したパラメーターに対する球関数が Appell の  $F_1$  を用いて表されることを示した。

Jack 多項式はパラメーター  $k > 0$  をもつ多変数の直交多項式で  $k = 1$  のとき Schur 多項式、 $k = 1/2$  のとき zonal 多項式 (対称空間  $SU(n)/SO(n)$  上の帯球関数) になる。

本講演では、退化したパラメーターに対する  $n$  変数の Jack 多項式が Lauricella の  $F_D$  を用いて表されることを述べる。これは  $n = 3, k = 1/2$  の場合は関口 [9] の結果から従うが、そこでの手法を一般の  $n, k$  に拡張することにより示される。

## 2 Jack 多項式

この節では、[3], [7], [10] に従って Jack 多項式について述べる。

$\lambda_1 \geq \dots \geq \lambda_n \geq 0$  ( $n \geq 2$ ) を満たす 0 以上の整数の組  $(\lambda_1, \dots, \lambda_n)$  を分割という。分割を  $\lambda = (\lambda_1, \dots, \lambda_n)$  とおき、 $|\lambda| = \sum_{i=1}^n \lambda_i$  とする。変数を  $x = (x_1, \dots, x_n) \in \mathbf{R}^n$  とする。多項式環  $\mathbf{R}[x_1, \dots, x_n]$  には、変数の入れ替えにより対称群  $S_n$  が作用する。対称群の作用により不変な元全体の集合を

$$\mathbf{R}[x]^{S_n} = \mathbf{R}[x_1, \dots, x_n]^{S_n}$$

と表す。  $\mathbf{R}[x]^{S_n}$  の元を  $n$  変数対称多項式という。

$\gamma = (\gamma_1, \dots, \gamma_n) \in \mathbf{Z}_{\geq 0}^n$  に対し、 $x^\gamma = x_1^{\gamma_1} \dots x_n^{\gamma_n}$  とする。また、分割  $\lambda$  に対して、 $\lambda_i$  が 0 でない  $i$  の総数を長さという。長さ  $n$  以下の分割  $\lambda$  に対するモノミアル対称多項式  $m_\lambda(x)$  を

$$m_\lambda(x) = \sum_{\gamma \in S_n \lambda} x^\gamma$$

で定義する。例えば

$$m_{(2,0)}(x_1, x_2) = x_1^2 + x_2^2,$$

$$m_{(1,1)}(x_1, x_2) = x_1 x_2,$$

$$m_{(2,1,0)}(x_1, x_2, x_3) = x_1^2(x_2 + x_3) + x_2^2(x_1 + x_3) + x_3^2(x_1 + x_2)$$

である。  $m_\lambda(x)$  は  $|\lambda|$  次斉次多項式である。

$k > 0$  とする.  $\vartheta_i = x_i \frac{\partial}{\partial x_i}$  ( $i = 1, \dots, n$ ) とおく. 2 階の微分作用素  $L(k)$  を

$$L(k) = \sum_{i=1}^n \vartheta_i^2 + k \sum_{1 \leq i < j \leq n} \frac{x_i + x_j}{x_i - x_j} (\vartheta_i - \vartheta_j)$$

で定義する.  $\mu, \lambda$  を分割とし, 半順序  $\mu \leq \lambda$  を

$$|\mu| = |\lambda| \text{ かつ, 全ての } i \geq 1 \text{ に対して } \mu_1 + \dots + \mu_i \leq \lambda_1 + \dots + \lambda_i$$

により定義する.

**定理 1 (Macdonald [7], [10])**

次の条件 (i), (ii) を満たす  $n$  変数の対称多項式  $P_\lambda^{(1/k)}(x)$  がただ一つ存在する.

$$(i) P_\lambda^{(1/k)}(x) = \sum_{\mu \leq \lambda} u_{\lambda\mu} m_\mu(x) \quad (u_{\lambda\mu} \in \mathbf{R}, u_{\lambda\lambda} = 1),$$

$$(ii) L(k)P_\lambda^{(1/k)}(x) = h(\lambda)P_\lambda^{(1/k)}(x) \quad h(\lambda) = \sum_{i=1}^n \lambda_i(\lambda_i + k(n+1-2i)).$$

$P_\lambda^{(1/k)}(x)$  を Jack 多項式という.

例えば

$$P_{(2,0)}^{(1/k)}(x) = m_{(2,0)}(x) + \frac{2k}{1+k} m_{(1,1)}(x),$$

$$P_{(3,0,0)}^{(1/k)}(x) = m_{(3,0,0)}(x) + \frac{3k}{2+k} m_{(2,1,0)}(x) + \frac{6k^2}{(1+k)(2+k)} m_{(1,1,1)}(x)$$

である.  $P_\lambda^{(1/k)}(x)$  は  $|\lambda|$  次斉次多項式である. また, Jack 多項式は内積

$$(f, g)_k = \frac{1}{(2\pi)^n n!} \int_{[0, 2\pi]^n} f(e^{i\theta_1}, \dots, e^{i\theta_n}) g(e^{i\theta_1}, \dots, e^{i\theta_n}) \prod_{1 \leq j < l \leq n} |e^{i\theta_j} - e^{i\theta_l}|^{2k} d\theta_1 \dots d\theta_n$$

に関して  $\mathbf{R}[x]^{S_n}$  の直交基底をなす.

### 3 Lauricella の超幾何級数 $F_D$

この節では, [2], [4], [6] に従って Lauricella の  $F_D$  について述べる.

$$\begin{cases} (a)_n = a(a+1) \cdots (a+n-1) & (n \geq 1), \\ (a)_0 = 1 & (n = 0) \end{cases}$$

とおく.  $n-1$  変数の超幾何級数 Lauricella の  $F_D$  は

$$\begin{aligned} & F_D(\alpha, \beta_1, \dots, \beta_{n-1}, \gamma; z_1, \dots, z_{n-1}) \\ &= \sum_{m_1, \dots, m_{n-1}=0}^{\infty} \frac{(\alpha)_{m_1+\dots+m_{n-1}} (\beta_1)_{m_1} \cdots (\beta_{n-1})_{m_{n-1}}}{(\gamma)_{m_1+\dots+m_{n-1}} m_1! \cdots m_{n-1}!} z_1^{m_1} \cdots z_{n-1}^{m_{n-1}} \quad (\gamma \neq 0, -1, -2, \dots) \end{aligned}$$

で定義される. 上の級数は  $|z_1| < 1, \dots, |z_{n-1}| < 1$  で収束する.  $F_D$  は積分表示

$$F_D(\alpha, \beta_1, \dots, \beta_{n-1}, \gamma; z_1, \dots, z_{n-1}) = \frac{\Gamma(\gamma)}{\Gamma(\alpha)\Gamma(\gamma-\alpha)} \int_0^1 t^{\alpha-1} (1-t)^{\gamma-\alpha-1} \prod_{i=1}^{n-1} (1-z_i t)^{-\beta_i} dt$$

をもつ。上の積分は  $\operatorname{Re}(\alpha) > 0, \operatorname{Re}(\gamma - \alpha) > 0$  のとき収束する。

$F_D$  は 1 変数のとき Gauss の超幾何級数

$${}_2F_1(\alpha, \beta, \gamma; z) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(\alpha)_n (\beta)_n}{(\gamma)_n n!} z^n$$

であり、2 変数のとき Appell の超幾何級数

$$F_1(\alpha, \beta_1, \beta_2, \gamma; z_1, z_2) = \sum_{m_1, m_2=0}^{\infty} \frac{(\alpha)_{m_1+m_2} (\beta_1)_{m_1} (\beta_2)_{m_2}}{(\gamma)_{m_1+m_2} m_1! m_2!} z_1^{m_1} z_2^{m_2}$$

である ([1])。

**定理 2** ([4], [6])

$u(z_1, \dots, z_{n-1}) = F_D(\alpha, \beta_1, \dots, \beta_{n-1}, \gamma; z_1, \dots, z_{n-1})$  は、微分方程式系

$$\begin{cases} \vartheta_i \left( \sum_{l=1}^{n-1} \vartheta_l + \gamma - 1 \right) u = z_i (\vartheta_i + \beta_i) \left( \sum_{l=1}^{n-1} \vartheta_l + \alpha \right) u & (i = 1, \dots, n-1), \\ z_i (\vartheta_i + \beta_i) \vartheta_j u = z_j \vartheta_i (\vartheta_j + \beta_j) u & (1 \leq i < j \leq n-1) \end{cases}$$

の  $(0, \dots, 0)$  の近傍で解析的で  $u(0, \dots, 0) = 1$  を満たす一意解である。

ここで、 $\vartheta_i = z_i \frac{\partial}{\partial z_i}$  ( $i = 1, \dots, n-1$ ) とおいた。

**補題 1** ([6])

変換公式

$$\begin{aligned} & F_D(\alpha, \beta_1, \dots, \beta_{n-1}, \gamma; z_1, \dots, z_{n-1}) \\ &= (1 - z_{n-1})^{-\alpha} F_D \left( \alpha, \beta_1, \dots, \beta_{n-2}, \gamma - \sum_{i=1}^{n-1} \beta_i, \gamma; \frac{z_{n-1} - z_1}{z_{n-1} - 1}, \dots, \frac{z_{n-1} - z_{n-2}}{z_{n-1} - 1}, \frac{z_{n-1}}{z_{n-1} - 1} \right) \end{aligned}$$

が成り立つ。

## 4 主結果

この節では、[12] に従って本研究の主結果を述べる。

### 4.1 Jack 多項式と Lauricella の超幾何級数

$n$  を 2 以上の整数とし、 $p, q$  は  $p \geq q \geq 0$  を満たす整数とする。分割  $(p, q, \dots, q)$  に対する  $n$  変数の Jack 多項式は  $n-1$  変数の Lauricella の  $F_D$  を用いて具体的に表される。

**定理 3** (T [12])

パラメーター  $k > 0$  と分割  $\lambda = (p, q, \dots, q)$  に対して、

$$(i) P_{(p, q, \dots, q)}^{(1/k)}(x_1, \dots, x_n) = \frac{(nk)_{p-q}}{(k)_{p-q}} \prod_{l=1}^{n-1} x_l^q x_n^p F_D \left( q-p, k, \dots, k, nk; 1 - \frac{x_1}{x_n}, \dots, 1 - \frac{x_{n-1}}{x_n} \right),$$

$$(ii) P_{(p, q, \dots, q)}^{(1/k)}(x_1, \dots, x_n) = \prod_{l=1}^{n-1} x_l^q x_n^p F_D \left( q-p, k, \dots, k, q-p-k+1; \frac{x_1}{x_n}, \dots, \frac{x_{n-1}}{x_n} \right)$$

が成り立つ。

$q - p$  は 0 以下の整数なので、右辺の超幾何級数は有限和になる。

$n = 2$  のとき、定理 3 (i) は

$$P_{(p,q)}^{(1/k)}(x_1, x_2) = x_1^q x_2^p {}_2F_1 \left( q - p, k, 2k; 1 - \frac{x_1}{x_2} \right)$$

となる。Gauss の超幾何級数の変換公式 ([8]) によりこれは

$$P_{(p,q)}^{(1/k)}(x_1, x_2) = \frac{(2k)_{p-q}}{(k)_{p-q}} (x_1 x_2)^{\frac{1}{2}(p+q)} {}_2F_1 \left( q - p, p - q + 2k, k + \frac{1}{2}; \frac{1}{2} - \frac{1}{4} \left[ \left( \frac{x_1}{x_2} \right)^{\frac{1}{2}} + \left( \frac{x_2}{x_1} \right)^{\frac{1}{2}} \right] \right)$$

と書き直せる。この等式は Lassalle [5] に記されている。つまり、定理 3 (i) は  $n = 2$  の場合に知られている結果の一般化と見なすことができる。

## 4.2 定理 3 の証明の概略

### (i) の証明

定理 3 (i) は斉次性を用いて、分割  $\lambda = (p, q, \dots, q)$  に対する  $n$  変数の  $P_\lambda^{(1/k)}(x)$  の満たす微分方程式  $L(k)P_\lambda^{(1/k)}(x) = h(\lambda)P_\lambda^{(1/k)}(x)$  と  $n - 1$  変数の  $F_D$  の満たす微分方程式系を関係づけることにより証明される。これは  $n = 3, k = 1/2$  のときに関口 [9] が用いた手法を拡張したものである。

$\nu \in \mathbf{C}$  に対して、

$$u(y_1, \dots, y_{n-1}) = F_D(-\nu, k, \dots, k, nk; 1 - y_1, \dots, 1 - y_{n-1}) \quad (1)$$

は、微分方程式系

$$\begin{cases} \vartheta_i \left( \sum_{l=1}^{n-1} \vartheta_l - \nu - k \right) u = y_i (\vartheta_i + k) \left( \sum_{l=1}^{n-1} \vartheta_l - \nu \right) u & (i = 1, \dots, n-1), \\ y_i (\vartheta_i + k) \vartheta_j u = y_j \vartheta_i (\vartheta_j + k) u & (1 \leq i < j \leq n-1) \end{cases} \quad (2)$$

の  $(1, \dots, 1)$  の近傍で解析的で  $u(1, \dots, 1) = 1$  を満たす一意解であることが変数変換と定理 2 により示される。

$\nu = p - q$  のとき、(1) で与えられる  $u$  を用いて

$$P(x_1, \dots, x_n) = \prod_{l=1}^{n-1} x_l^q x_n^p u \left( \frac{x_1}{x_n}, \dots, \frac{x_{n-1}}{x_n} \right)$$

とおくと、 $F_D$  の定義と補題 1 から  $P$  は対称多項式であることが示される。また、微分方程式系 (2) から

$$L(k)P = h(\lambda)P$$

が導かれる。定理 1 から  $P_\lambda = cP$  を満たす定数  $c$  が唯一つ存在する。この両辺をモノミアル対称多項式の一次結合で表したときの  $m_\lambda(x)$  の係数を比較することにより、定数  $c$  が決まり定理 3 (i) が導かれる。

## (ii) の証明

微分方程式系 (2) は

$$u(y_1, \dots, y_{n-1}) = F_D(-\nu, k, \dots, k, -\nu - k + 1; y_1, \dots, y_{n-1})$$

を解にもつが,  $\nu \in \mathbf{Z}_{\geq 0}$  のとき, これは多項式になり, 一意性より

$$F_D(-\nu, k, \dots, k, -\nu - k + 1; y_1, \dots, y_{n-1}) = \frac{(nk)_\nu}{(k)_\nu} F_D(-\nu, k, \dots, k, nk; 1 - y_1, \dots, 1 - y_{n-1})$$

が成り立つ. これより (ii) が示される.

本講演で述べた結果に関連して, 定理 3 (i) の証明中の  $\nu \in \mathbf{C}$  に対する微分方程式系 (2) の解析解 (1) は, 退化したパラメーターに対する A 型の Heckman-Opdam の超幾何級数に対応していることを示野信一氏 (関西学院大学) との共同研究で示した ([11]).

## 参考文献

- [1] P. Appell, J. Kampé de Fériet: Fonctions hypergéométriques et hypersphériques - polynômes d'Hermite, Gauthier-Villars, Paris, 1926.
- [2] 原岡喜重, 「超幾何関数」, 朝倉書店, 2002.
- [3] 堀田良之・渡辺敬一・庄司俊明・三町勝久, 「群論の進化」, 岩波書店, 2004.
- [4] K. Iwasaki, H. Kimura, S. Shimomura, M. Yoshida, From Gauss to Painlevé: A Modern Theory of Special Functions, Vieweg+Teubner Verlag, 1991.
- [5] M. Lassalle, Polynômes de Jacobi généralisés, C. R. Acad. Sci. Paris, **312** (1991), Série I, 425–428.
- [6] G. Lauricella, Sulle funzioni ipergeometriche a piu variabili, Rend. Circ. Mat. Palermo **7** (1893), 111–158.
- [7] I. G. Macdonald, Commuting differential operators and zonal spherical functions, Algebraic groups, Utrecht 1986, 189–200, Lecture Notes in Math., **1271** (1987), Springer, Berlin.
- [8] 森口繁一 他, 「数学公式」, 岩波書店, 1960.
- [9] 関口次郎, 「 $SL(3, \mathbf{R})$  の帯球関数について」, 数理解析研究所講究録 266 巻, (1976), 259–274.
- [10] 白石潤一, 「量子可積分系入門」, サイエンス社, 2003.
- [11] N. Shimeno and Y. Tamaoka, The hypergeometric function for the root system of type A with a certain degenerate parameter, 準備中.
- [12] 玉岡優一, 「Jack 多項式と Lauricella の超幾何級数」, 2017 年度修士論文, 関西学院大学大学院理工学研究科.